

英語の語源でわかる人間の思想の歴史

語源力

渡部昇一

Shoichi Watanabe

海竜社

英語の語源でわかる人間の思想の歴史

語源力

渡部昇一

Shoichi Watabe

江苏工业学院图书馆
藏书章

【著者紹介】

渡部昇一（わたなべ しょういち）

昭和5年山形県生まれ、昭和30年上智大学大学院修士課程修了。ドイツ・ミュンスター大学、イギリス・オックスフォード大学に留学。ミュンスター大学哲学博士（1958年）、同大学名誉哲学博士（1994年）。専攻は英語学。上智大学教授を経て、同大学名誉教授。イギリス国学協会会長。日本ビブリオフィル協会会長。第一回正論大賞受賞。現在、幅広い評論活動、著述活動を展開している。著書には『英語学史』（大修館書店）、『英文法を知っていますか』（文春新書）、『渡部昇一の「日本語のこころ」』（ワック）など、英語学、言語学に関する専門書のほか、『年表で読む 明解！ 日本近現代史』『知っておくべき日本人の底力』『一瞬で脳力がアップする！ 考える技術』（以上、海竜社）など多数ある。

語源力

平成二十一年三月二十四日 第一刷発行

平成二十一年四月四日 第二刷発行

著 者

渡部昇一
わたなべ しょういち

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二の十一の二十六 一〇四—〇〇四五

電話 東京 〇三（三五四二）九六七（代表）

郵便振替 〇〇—一〇—九—四四八八六

海竜社ホームページ <http://www.kairyusha.co.jp>

印刷・製本所 図書印刷株式会社

乱丁本・落丁本はお取り替えします

©2009, Shoichi Watanabe, Printed in Japan

英語の語源でわかる人間の思想の歴史

語源力

第1章 「運命」——この神秘的なるもの

運命は誰が決めるのか 14

神様は「すべてお見通し」である 14

「神の万能」か「人間の自由意志」か 17

天国行きと地獄行きはどこで決まるか 21

人の運命を決めるのは誰か 25

「運命」を表す七つの言葉 28

人間の「計らいの外」にあるもの 28

運命の女神フォルチュナとローマ人 32

運命の女神は変わりやすい 35

人生は運か努力か 40

キリスト教の浸透で変わった運命観 40

神は人間に自由意志を許した 45

人生は、九割が運で一割が努力 49

第2章

「男と女」——心動かされる、謎の存在

男と女を語ることは、人間そのものを語ることである 54

言語に秘められる「男と女」の世界観 54

日本の男女観は鍵と錠の関係 58

「アダムとイヴ」がすべてを語る、西洋の男女観 64

西洋における男女関係 64

言葉が示す、男性中心の文化圏 67

「誰が肉を切り分けるのか？」の本当の意味 73

「言葉」が生まれるところ 76

第3章

「奇跡」

驚くべき不思議現象

人力でも自然の働きでも起こりえない不思議 92

奇跡は、天から降りてくる 92

宗教は「奇跡」によって成り立つ 94

バチカンの奇跡の二大宝物 99

奇跡を伝える「物」 104

「奇跡」は本当に起こり得るか

奇跡の肯定は怪しい迷信を生んだ

108 108

キリスト教の出現で変わった男女観 79

女性の地位が高くなったのはなぜか 79

聖母マリアがもたらした女性尊重思想 82

「マリア」を呼ぶ言葉レディー、マドンナ、マダム 85

女性の乳房は輝かしいか、それとも卑猥か 88

第4章

「税」——いつの世も、東西問わず問題の火種

イギリス国民が最も嫌悪した税、「消費税」

140

「税」の語源は「奪い取られる」や「評価する」から

140

通行料「tol」の歴史

146

習慣から生まれた「カストムズ」、義務と権利の差に至る「デューティー」

149

奇跡の語源は、驚きの様子から

113

奇跡には三つの顔がある

116

自然科学の発達で否定され始めた奇跡

121

「奇跡」と「魔法」の区別

121

世の中の不思議が不思議でなくなった

125 126

奇跡を抜きにした、新しいキリスト観

「ルルドの奇跡」がヨーロッパの知的風土を変えた

132

奇跡や不思議は危ない観念でもある

134

人の感情に重くのしかかる言葉

154

「税」の原義は、「押しつける」「巻き上げる」「召し上げる」「切り取る」
タリフ問題が引き起こした世界の大騒動

159

154

累進課税が、イギリスを衰退させた

166

人頭税 (poll tax) と累進課税 (supertax)

166

累進課税がイギリスをだめにした

172

第5章

「靈魂」——その存在を信じるか、信じないか

あなたは、神や靈魂の存在を信じるか

178

「スピリチュアリズム」とは、哲学語である

178

精神や靈の語源は、人間の「呼吸」から

184

「靈魂」と人間を関連つけたソクラテス

191

シューモス (thumos) と「ゴースト (ghost) の成り立ち

195

第6章

「王と皇帝」——その違いは何か

「キング」と「エンペラー」はどう違うのか

226

「キング」と「クイーン」の意外な語源

226

「天皇」が「エンペラー」と訳されたのはなぜか

231

「キング」に込められた「一族の長」という重み

235

「エンペラー」の原義は「戦場での命令者」

239

人間の肉体と精神の関係

216

近代ヨーロッパにおける「物体（肉体）」と「精神（思惟）」の関係

216

近代ヨーロッパ成立の原動力となったカントのオカルト観

220

人間の魂や精神はどこにあるのか

199

精神の所在地は、医学用語にヒントがある

199

「精神」や「魂」の人間独特の機能「知力、理解力」

205

西欧思想の根本となった哲学的「靈魂説」

211

英語の語源は、ドイツ語を見ればわかる

246

今なお続く「レックス（国王）」につらなる最上流階級
英語の語源は、ドイツ語で見るとわかりやすい

250

246

権力は「言葉の力」で左右される

257

「天皇」は「最高の統一者」

257

中華文明圏の皇帝と日本の天皇はどちらが上位か
権力は、称号を持つ「言葉の力」で大きく変わる

267 263

まえがき——語源学は「イメージの考古学」である

「生きる」と「息^{いき}する」は同じ語源の言葉であることは誰にでも納得できることであろう。しかし普段は「生」と「息」という漢字を使うので同じ起源の言葉であることを意識しないのである。

しかし「いきる」と「いきする」が同じ語源の言葉であることを考えてみると、太古の日本人が、「生命」と「呼吸」との関係についてどう考えていたかがなまなましく理解されるのではないだろうか。また「日」と「火^ひ」は上代の日本語ではF音の甲類と乙類の差があるとされるが、語尾の微妙な変化で同一語源の意味が分化することは比較言語学的にも認められることで、「ホカッと暖かい」とか「ポツポツと燃える」という擬声語から、「日」も「火」も暖かいとか熱（暑）いとかいう原義で出来たと考えられる。それは英語の本（book）の語源が、それと同じ語源のドイツ語ブーフ（Buch）と同じく、「ぶなの木」を意味するブーヘ（Buche）から出ているのと同じ造語法である。元来、「本」は「ぶなの木」の板に文字を書いたことからできたのである。

語源はこのような古代人がイメージしていたことを、数千年もさかのぼって知ろうとす

る学問である。私は語源学を「イメージの考古学」だと言うことにしている。古代人が、靈魂とか運命とかいうものを最初にどうイメージしてその言葉を作ったのだろうか。それを理解することによって、古代人の人世観や世界観をある程度推測しうるし、その言葉を使ってその後に発展してきた思想や哲学を理解するヒントにもなるのではないだろうか。つまり「語源と哲学」とか「語源と思想」というものが考えられるのではないだろうか。

こんなふうに考えるようになったのは、私の中に哲学と語源に対する興味を植えつけてくださった恩師たちがおられたからであると、喜寿を過ぎた今、感謝の念を新たにしている次第である。最初に哲学に対する興味を起こさせてくださったのはフランツ・ボツシュ上智大学教授であった。先生の哲学の授業は西欧哲学の認識論（エピステモロジー epistemology）の歴史であった。認識論という哲学中の哲学、俗に純粹哲学というものについて一年間にわたって徹底的に指導してくださった。そのおかげで私はその後、ずっと哲学の本を読み続ける基礎ができたように思う。また哲学史上の「知識」については「大西祝博士のものが便利だ」と教えてくださった中・高時代の恩師、佐藤順太先生にも感謝したい。どの分野にも便利な本というものがあることを若い頃に教えていただいたことは有難かった。

「語源」についてはカール・シュナイダー教授の御指導を受けたことが決定的である。戦後の日本の言語学界においてはソシュールの影響が強く、その『言語学概論』に「語源は

学問でない」という主旨の記述があつたので、英語の語源学を教える先生や著述に日本で出会うことがなかった（今から考えるとソシユールは語源学は共時言語学でないと云つていただけの話であり、ソシユールも晩年は語源もやつていたのである）。天の与えてくれたとしか言いようのない幸運によつて（「運」の語源は本書でも扱います）、私は超がつく第一流の語源学者の指導を受けることができた。考えてみれば印欧比較言語学というのは語源学だったのである。印欧比較言語学の大成者の一人に数えられるヘルマン・ヒルトの最後のただ一人の弟子だった人がシュナイダー先生であつた。先生は戦時中は暗号解読要員として動員されていたので語源解明にも独特の鋭さがあつたように思われる。先生の下で、先生やその優秀な弟子たちがゲルマン系の単語の語源の論文を仕上げる現場にいたことは知的興奮の日々であつた。単に語源辞書を引くのととは違う次元の体験だった。

さらに幸運だったのは、一般言語学のペーター・ハルトマン教授の講義やゼミが、ほとんど言語哲学だったことである。プラトンの『クラテロス』から始まって、フッサール、ヴィトケンシュタイン、サピア・ヴァイスゲルバーなどなど、言語と哲学を同時に教えられるような気がしたものである。中世ラテン文法が近世初期の英語の文法へ及ぼした影響を論ずる際に、私がハイデガーの教授資格論文を利用することなどを可能にしてくださつたのは先生の学恩に負うものだった。

語源と哲学はこのように私の人生の大部分を占める関心事であり続けた。たまたま二十年ぐらい前に新潮社主催の連続講演会が新宿の紀伊國屋ホールで催された。その数回のテーマに私は人生觀や哲学と關係の深そうな「運命」「男と女」「奇跡」「税」「靈魂」「王と皇帝」という項目を選んだ。一つのテーマに一夕の講演というわけである。聴衆の中には、私の先輩格にあたる学者、若い学生、主婦、会社員など多様であつて、話のレベルを定めることが難しかったことを覚えてゐる。その話をまとめてくださった方には申し訳ないが、すぐに本の形にするだけの手間をかけずにいた。

このたび哲学科出の柿本学佳氏の御協力を得ることができて、読みやすい形にまとめることができた。元來が座談調の講演であり、内容は私が学生相手に喫茶店で話すような種類のことであるから、順番に通読されずに、開いたところをお読みくださっても、それなりの話になつてゐると思う。

今回の出版にあたっては、海竜社の下村社長の特別の御配慮をいただいた。また最終の原稿整理には同社の美野晴代さんの助けを得た。厚く御礼申し上げる次第である。

平成二十一年二月

渡部昇一

第一章

「運命」

この神秘的なるもの

運命は誰が決めるのか

神様は「すべてお見通し」である

日本語だけで考えると、追求すればするほど、漠^{ばく}としてつかみどころがなくなる概念も、視点やアプローチ方法を変えれば明確になってくることがある。概念を分析する武器を替えてみるのだ。「運命」というのもそうだ。「自分の運命は、この先どうなっていくのか」「そも、運命とは何ぞや」と日夜呻^{しん}吟^{ぎん}した人は多いはずだ。そして、悩めば悩むほど、どんどんわからなくなっていく。「運命に身を任せる」とはよくいわれるが、身を任せる当の運命が、不確実で、不明解ならおちおち任せてもいられないだろう。そして結局は運命の波に翻弄^{ほんろう}されてしまうことになる。

ベートーヴェンはその交響曲第五番の冒頭を「運命はかく扉を叩く」といったといわれている。「運命」という表題は、この言葉に基づいてつけられた。確かに、あの有名な出だしは、そういわれてみれば、運命を予感させるように思えてくる。しかし、